# ２［評論］　『アニメは、なぜ当たる』

［１］　鈴木プロデューサーとしては、「との神隠し」という作品を「エンターテインメント性とテーマ」＝「楽しくて、深い味わいがある」＝「心に残って、記憶にも残る」作品であればヒットするであろう、と考えたわけですね。「深い味わい」「記憶に残る」部分、それが「テーマ」というフレーズで表現されるわけですが、これはもうカオナシというキャラクター、その存在につきます。

［２］　はじめてカオナシを見た時、その不気味な存在感に、ちょっと嫌悪感を感じました。映画の中では、千尋にまとわりついて、何かとコミュニケーションをとろうとするのですが、「あ…あ…」と言うだけでうまく果たせない。

［３］　物品や金銭を媒介にしなければ、他者との接触をとることができない。また他者との距離を的確に計測できない。そんな役割をカオナシというキャラが演じているのですが、実を言うとそれらのことを知った時、「まるで自分のようだ」と思いました。

［４］　①これは推測ですが、僕と同じように「このキャラって、自分みたいだなあ」と思った人は、意外に多いのではないでしょうか。僕がそうであったように、そう感じながらも口には出さない。そして、その不快感ゆえにカオナシというキャラクターは、多くの人の心を捉えたというか、無視できなかったのではないかと思います。

［５］　カオナシの存在については、公開当時多くのメディアや評論家が取り上げましたので、ここで繰り返しませんが、このキャラクターがいたからこそ、「千と千尋の神隠し」という映画に精神的な奥行きが出たと言えるでしょう。

［６］　カオナシを現代社会に生きる人たちと関連づけて論じる。それがメディアを介して多くの人たちの目に触れる。そうした②”ネガティヴな親近感”を感じさせることが、映画への関心を高める結果になったわけです。

［７］　こうしたやり方を、実はジブリ作品ではよく用います。映画はａゴラクですから、いかなる場合も楽しさと心地よさを与えてくれるもの、と考えている大衆に、ある種のショックを与えます。鈴木プロデューサーが「洋画との差別化を図る」と発言したのも、エンターテインメントｂイッペントウの洋画と宮崎アニメは違う、ということを強調したかったのでしょう。

（中略）

［８］　カオナシに鈴木プロデューサーが注目したのは、例の、コンテを読み込み「この監督は何を考えているのか？」ということを探る作業の最中だったそうです。

「これだけたくさんのシーンをカオナシに費やしているのだから、きっと重要だと思っているのだろう」と考えた鈴木プロデューサーは、③そこに込められた深い意味と社会批評性を見いだし「千と千尋の神隠し」を代表するキャラクターとして、ポスターや広告類に大きくｃロシュツしていきました。

［９］　すると宮崎監督が「鈴木さん、なぜカオナシをこんなに大きく出すの？」と聞いたそうです。「いや、これは千尋とカオナシの映画ですよ」と鈴木さんが答えると、④「ふーん」と宮崎監督。これが何回かのラッシュ試写の後、当の宮崎監督が「これはカオナシの映画だ!!」と言い始めて、鈴木さんは「今ごろなにを言ってるんですか」と笑った……というエピソードが残されています。

［10］　⑤プロデューサーが時代を読み解き、そこに訴えかける素材を映画の中から発見したものの、映画を作っている当人は気づかなかったという例です。ですから、新聞広告で「みんなの中に、カオナシはいる」と宮崎監督に言われるまでもなく、観客はとっくに気がついていたのです。

［11］　携帯電話やインターネットなど、他者とのコミュニケーションをとるツールこそ進化しているものの、それらに依存するばかりで、人間対人間の対話が苦手で、自己中心的。それゆえプライドを傷つけられるとキレる。自分の中の、内なる“カオナシ性”を少しでも意識する人にとって、「千と千尋の神隠し」という映画は、見ずにはいられない作品であったのです。

［12］　映画を創る監督と、時代の空気をｄビンカンに感じ取るプロデューサー。両者が力を合わせ、面白い作品を作り上げ、その内容をメディアを通して社会に伝える。大げさなキャッチコピーも、興行成績のｅコジや、スタッフ・キャストの過去の実績を連呼しなくても、世の人々はちゃんと関心を持ってくれ、そこに自分の好奇心を刺激する要素を発見すれば、人々は映画館に来てくれるものなのです。

●語　注

プロデューサー＝作品制作全体を統括する責任者。

「千と千尋の神隠し」＝宮崎監督による長編アニメーション映画。二〇〇一年公開。

カオナシ＝「千と千尋の神隠し」の登場人物の一人。

キャラ＝キャラクターの略。登場人物やその性格。

ジブリ＝スタジオジブリ。アニメを中心とした映像制作会社。

画コンテ＝イラストなどで映画のカットを説明した映像設計図。

ラッシュ試写＝編集作業が終わっていないフィルムの試写。

■覚えておきたい語句

□３フレーズ………………句。熟語。

□６コミュニケーション…言葉や文字などで意思の伝達を行うこと。

□８媒介……………………双方の間に立って、両者の関係を取り持つこと。

□18ネガティヴ……………消極的・否定的なさま。

□21イッペントウ…………………一方にのみ傾いていること。

◆漢字

　本文中の二重傍線部ａ～ｅのカタカナを漢字に直せ。

ａ［　　　　　］ｂ［　　　　　］

ｃ［　　　　　］ｄ［　　　　　］

ｅ［　　　　　］

問１　傍線部①の「これ」の内容を三〇字以内で簡潔にまとめて答えよ。【読みのセオリー】　８点

　〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問２　傍線部②とあるが、⑴どのような点が「ネガティヴ」なのか。⑵どう感じることが「親近感」なのか。本文中の表現を用いて説明せよ。⑴６点　⑵６点

⑴［　　　　　　　　　　］

⑵［　　　　　　　　　　］

問３　傍線部③とあるが、「千と千尋の神隠し」という作品が持つ現代社会への批評性を、最も端的にまとめて述べている段落を一つ選び、段落番号で答えよ。７点

［　］段落

問４　傍線部④とあるが、このときの宮崎監督の心情の説明として、最も適当なものを次から選べ。７点

ア　鈴木プロデューサーの意見への反論を考えている。

イ　鈴木プロデューサーの意見に納得せざるを得ないでいる。

ウ　鈴木プロデューサーの意見に半信半疑でいる。

エ　鈴木プロデューサーの意見の鋭さに感心している。

オ　鈴木プロデューサーの意見を不愉快に思っている。

　〔　　〕

問５　傍線部⑤とあるが、⑴この「素材」とは何で、⑵それは「千と千尋の神隠し」という作品に「エンターテインメント性」以外の何を付け加えたのか。⑴は四字、⑵は七字で本文中から抜き出せ。⑴３点　⑵６点

⑴［　　　　］

⑵［　　　　　　　］

問６　本文の内容と合致するものを次から一つ選べ。　７点

ア　ジブリ作品は、観客の大衆に、ある種のショックを与えるやり方によってテーマを深めている。

イ　鈴木プロデューサーは、宮崎監督の作品から世の人々の好奇心を刺激する要素を引き出してきた。

ウ　携帯電話やインターネットなどのコミュニケーションツールの発達は、対話能力を低下させる。

エ　宮崎監督の創造性は、優れたプロデューサーの適切なサポートがあって初めて発揮される。

オ　映画監督が気づくよりも早く観客が作品のテーマに気づく作品こそが、映画館に客を呼べる。

　〔　　〕

【解答】

漢字　ａ娯楽　ｂ一辺倒　ｃ露出　ｄ敏感　ｅ誇示

問１　カオナシは多くの人が無視できないキャラクターだということ。（29字）

別解＝カオナシのキャラが自分みたいだと思った人は多いということ。（29字）

問２　⑴嫌悪感（「不快感」でも可）を感じる点。

⑵（カオナシを）自分と同じようだと感じること。

問３　［11］（段落）

問４　ウ

問５　⑴カオナシ

⑵精神的な奥行き

問６　イ

【現代文読解用語200】

問　次の言葉の意味ををそれぞれ後から選べ。

①コモンセンス　（　　）

②アイロニー　（　　）

③アナロジー　（　　）

④アナクロニズム　（　　）

⑤アンビバレンツ　（　　）

⑥アンチテーゼ　（　　）

⑦コンセプト　（　　）

ア　時代錯誤

イ　同一の対象に対して相反する感情を同時に持つこと。

ウ　皮肉

エ　類推・類比

オ　ある主張に対する反対の考え。

カ　基本的な考え方。

キ　常識

【解答】

①キ　②ウ　③エ　④ア　⑤イ　⑥オ　⑦カ

【読みのセオリー】

★指示内容の発見と確認

　原則的には指示語から本文を遡るようにして指示内容を見つけていく。この場合、まず前の本文から探していくのが順当な方法となる。しかし、に指示内容が指示語の後に述べられている場合もある。筆者が読者に向かって前もって何かを訴えようとする（言い訳をする）場合に見られる。

〔要　約〕

前半部の［１］〜［７］段落のまとめは［５］・［６］段落である。

後半の［８］〜［12］段落のまとめは［12］段落だが、カオナシの意味の発見を述べた［８］段落も重要だ。

　　　　　↓

多くの人たちに〝ネガティヴな親近感〟を感じさせたカオナシの存在が「千と千尋の神隠し」に精神的な奥行きを与えた。プロデューサーはカオナシに社会批評性を見いだし、人々はそこに好奇心を刺激され映画館に来た。（100字）

〈筆者＆出典〉斉藤守彦（さいとう・もりひこ）一九六一（昭和36）～二〇一七（平成29）年。静岡県生まれ。映画業界紙記者などを経て、フリーの映画ジャーナリストに転身。映画作品制作から宣伝や配給など、映画産業全体に目配りをした執筆活動を行った。本文は、『宮崎アニメは、なぜ当たる――スピルバーグを超えた理由』（朝日新書、二〇〇八年）より。

☆「セオラム　補充問題」問題は次の３種類があります。

　＊差し替え　　　……　当該の問と差し替えるもの

　＊追加　　　　　……　同じ問いで追加された問題

　＊新問　　　　　……　追加が可能な新たな問題

問１　傍線部①の「これ」の内容の説明として最も適当なものを次から選べ。

ア　多くの人がカオナシを見た時、不気味な存在感に嫌悪を感じたこと。

イ　カオナシは他者との距離を的確に計測できないキャラだということ。

ウ　カオナシというキャラの役割を多くの人が知ったということ。

エ　多くの人がカオナシを自分みたいだと思い、無視できないこと。

オ　筆者がカオナシを「まるで自分のようだ」と思ったこと。

問２　傍線部④とあるが、このとき宮崎監督は鈴木プロデューサーの答えをどう思ったのか。宮崎監督の心情を説明せよ。

問３　本文全体を通して、「千と千尋の神隠し」という作品において「カオナシ」はどのような役割を果たしたと述べられているか。説明せよ。

【解答】

問１　エ

問２　鈴木プロデューサーの意見に興味を覚えつつも、本当かとの疑いも持っている。

問３　現代社会に訴えるテーマを表し、作品に精神的な奥行きを出す役割。